

日本宣教の保護者聖フランシスコ・ザビエル司祭 12月3日 分かち合い

マルコ 16-20

聖フランシスコ・ザビエルと言えば、日本に最初にキリスト教を伝えた人として小学生でも知っている有名な人物。東洋への宣教の使命を帯びてポルトガルを出てから8年、インドやマラッカを経て、はからずもたどり着いたのが鹿児島、1549年のこと。日本での3年にも満たない、休むことのない活動の後、豊後を後にしてゴアに戻り、中国入国を目論みつつ、上川島で46歳の生涯を終えたことは、ご承知の通り。

その労苦に満ちた宣教活動については、多くの書物が書かれ、人々の知るところだが、そもそも、どうしてそのような波瀾にとんだ人生を歩むことになったか、知る人は多くはない。

フランシスコは、スペインのナバラ王国の要職にあった父親が治めるザビエル城に生まれたが、戦いに明け暮れる日々の中、戦に倒れた軍人の兄たちと異なり、ゆくゆくは、父親同様の道を歩むべく、当時の学問の中心、パリ大学に進む。しかし、その学寮で共に生活することになった胡散臭い男、イグナチオの度々の勧めにより、人生についての考えをあらため、さらに30日におよぶ霊操を受けた結果、人生が180°変わることになる。パウロやイグナチオが経験した「回心」の経験である。イグナチオと違い、彼が自分の回心について記したものがないので、どのように世俗的な夢から、イエスの友として、新たな人生を歩み出したかの詳細を知ることはできない。しかし、その後の彼の人生の展開、特に、誕生したばかりのイエズス会の重要なメンバーでありながら、単身、東洋への旅に出、様々な困難を乗り越えて宣教の道を先へ先へと進み、その実りを味わうことなく、大陸を目の前にした孤島で最期を迎えたことを考えると、その回心がどれほど彼に大きなインパクトになったかは想像にあまりある。

フランシスコの姿を描いた絵はたくさんあるが、多くに共通するのは、赤く燃えるように描かれた心臓である。それは、まさに、彼の生涯、つねに彼を生かし続けたイエスの愛、また、それに応えた彼の愛を表すにふさわしい形ではないだろうか。(S.T.)